

2012年9月16日(日)

第6回

先生自身のところ

「哲学する」ということ

「哲学とは何か」、この問題は、決して哲学者のみが考えるべき問題ではない。ここで本質論を述べるならば、そもそも哲学という学問は、哲学者自身のために存在しているのではなく、「“一般”人間そのもの」のために存在している学問である。

哲学者が哲学する所以は、言うまでもなく「真理」を探究するためである。では、真理とはいかなるものなのか。

真理とは、いかなる時代・社会においても普遍的に存在し続ける「完全無欠な存在物」である。だが、今、我々人間がこの「真理」について哲学するとき、「本当にそのような“完全無欠な存在物”というものが在るのか」という“疑問”が生じる。ここで、この「完全無欠な存在物」について捉えるとき、以下のような論理が成り立つ。即ち、

(1)「人間は『不完全な存在者』である」→(2)「不完全な存在者が『完全な存在者』を知ることは“不可能”である」→(3)“不可能”という概念は、本来、いかなる場合においても“不可能”であるわけだから、“不可能”を可能として具現することは『不可能』である」

そもそも、「不可能を可能にする“可能性”」というものは、本来、そこに可能性が内在している対象において該当する考え方だ。言うまでもなく、不可能という概念に内在する本質は“不可能そのもの”であるわけだから、我々が一般社会で耳にする「不可能を可能にした」という不可能は、本来において、「不可能を可能にする“可能性”」が内在していたものだ。

今ここで、上記の論理の流れで「真理」について捉えると、不完全な存在者である人間が「完全無欠な(永久不変な)存在者」を知ることは“不可能”であるわけだから、人間が「完全無欠な存在としての『真理』」を知ることは不可能な行為であるということがわかる。

我々人間が、「哲学は、“真理探究”を目的とする学問である」という大前提の下で思索するとき、前述のように、人間が真理を知ることは不可能であるから、人間が哲学を研究する行為には何らの利益もないように捉えられる。だが、実際はそうではない。

不完全な存在者である人間が、「完全無欠、且つ、絶対的な真理」を知ることは不可能ではあるが、哲学の研究を通して、少なくとも「真理を探究する“道のり”」を歩むことはできる。「真理を探究する“道のり”」を歩む、まさに、これこそが哲学を研究する目的なの

学問にあって、学者を志す、

学問
その先、94の

だ。

私は、長年、「諸学問」(sciences)の基礎としての『哲学』を研究してきた。しかし、未だに、「完全無欠な『知』、ひいては、『真理』」への到達には至っていない。では、今後はどうであろうか。

私自身、これからの研究において真理に到達することは不可能であるが、それでも私は、真理を探究するための道のりを歩んでいきたいと切望している。「勇気を持って勇敢に」、自分から率先して「真つ暗闇の“暗黒の世界”」に自分の身を置き、そこで手探り状態で前に進み、もがき苦しみながら「知の光」、そして「真理の光」を探し続けていきたいという所存である。なぜならば、そうした行為そのものが「哲学する」という行為であるからだ。

以上で述べた考え方から導き出せることは、哲学に“関係”する上で最も大切なことは、「哲学の知識を得る」という行為にとどまることなく、それに加えて、「自分自身が哲学する」という行為であるということだ。

「哲学する」ということ。

哲学とは何か

本質論を述べるとは、

「哲学」という学問は、哲学者自身のために存在しているのではなく、

「一般」人間そのもののために存在している。



○ 一般と一般的は違う。

一般 ... ① 広く言思われ成り立つこと。ごく当たり前であること。
すべてに対して成り立つ場合にも、
少数の特殊例外を除いて成り立つ場合にも使う。
② 普遍、③ 普通、多くの普通の人々。

② 一樣であること、同様

一般的 ... ① 或る部類のものに共通であるさま、普遍的
② 或る部類のもの的大部分に共通であるさま。

哲学者が「哲学」をする所以

真理を探究すること

真理とは何かなるものなのか？

いかなる時代・社会においても普遍的に存在し続ける完全無欠な存在物である。

本当にそのような「完全無欠な存在物」というものがあるのか？

我々人間が
この「真理」について
哲学するとき生じる疑問。

完全無欠な存在物について捉えるとき、
以下のような言論理が成り立つ。

(1) 人間は不完全な存在物である。



年をとる(生を重ねる)ごとに、自分がいかに不完全か
身を投じて知っていく。

↓
自分自身の身を投じて知らない
限り、理解することはい難しい。

(2) 不完全な存在者が、
完全な存在者を知ることは「不可能」である。



(3) 「不可能」という概念は、本来いかなる場合においても「不可能」
であるから、
「不可能」を「可能」として具現することは「不可能」である。

「不可能」を可能にした

この中に可能を生か
内在している



「もともと可能なこと」

「はい、だから「可能」を「不可能」と
思い込んでいたことである。」

こうして思い違いは
世の中にたくさんある!



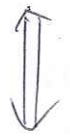
考えるためのセント

不可能と可能 という概念の関係を
自分なりに毎日思索してみる。

possibility

(名)

- 1. 可能性、実現性
- 2. ありうること、可能なこと。
- 3. 見込み、発展の可能性、将来性。



impossibility

(名)

- 1. 不可能(性)
- 2. 不可能なこと。

可能

… (現に実現していなくても) 実現の余地があること。
実際ありうること。

(しよと思えば) できる意味にも、理論上や規定上は
矛盾なく、そういう状態が考えられる意味にも使う。

真理について捉えること

不完全な存在者である人間が

「完全無欠な(永久不変な)存在者」を知ること

不可能



人間が「完全無欠な存在としての『真理』」を知ること

不可能

哲学は「真理探究」を目的とする学問である。

大前提の下で思索するとき

人間が真理を知りたがることは **不可能** だから

人間が哲学を研究する行為には
何ら利益もないと捉えられる。

実際にはそうではない!!!



不可能

「完全無欠、且つ、絶対的な真理」を知ること。

可能

哲学の研究を通して、「少なくとも真理を探究する道なり」を歩むこと。



真理を探究する「道なり」を歩む

これを哲学を研究する目的!!

カント (Immanuel Kant, (1724-1804))

『人生に哲学をいつまで』より

p103 25.

カントは「-ニヒスベリ」大学で学生に講義する際、

「単に暗記をするため思想を学ぶのではなく『思考すること』を学ばなさい」

「哲学を学ぶのではなく『哲学あること』を学ばなさい」

と述べたこと伝えられている。

非常に着目な入力で
豊かな思索活動を展開する
こと一生涯専心して
偉大な哲学者。

生井先生

長年、「言者 学問」(sciences)の基礎として「哲学」を研究してきた。



完全無欠な「知」もては「真理」に

到達には至っていない。



これからの研究において、

真理に至り達することは不可能である。

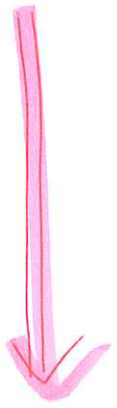
それでは!

真理を探究するための道のりを

歩んでいきたいと切望している!

「勇気を持って勇敢に」

真理を探究するための
道のりを歩む
プロセス



自分から率先して
「真、暗闇の「暗黒の世界」に
自分の身を置き、

「探り状態」で前に進み
「わがき苦しみにながら

「火の光」として「真理の光」を探究し続けていく。

どうして「行為」なのかわか
「哲学ある」という行為

哲学する

とても勇気のいること!

easy wayはいくらでもある、
しかし、哲学するということは、

真の暗闇の世界に自ら身を置く。

毛がききしみたら

「知の光」として「真理の光」を探し続ける。

知に到達することより、

知に到達しようとする道のみ

いかに自分に厳しくするか

||

人生そのもの。

地球に存在する一個の理性的存在者としての源泉性が
ここにある!

あえて、
わかりやすく言うならば、

「やらせ」「やらせど」、その道がいかに遠いかを知る事。

↓
= 哲学をする、ということ。

哲学に「関係」あることで最も大切なこと

「哲学の知識を得る」



このためにとどまることなく、

「自分自身が哲学する」

この行為が必要。

人間 (Homo sapiens sapiens) とはどのような存在である。

- 知的存在者としての人間 ... 本能と知性を持つ。
- 非知的存在者としての動物 ... 本能のおもむきままに行動

→ 「知性」と「理性」の違い。
9/21 - P18. 参照.